

JLSR ニュースレター

世界は繋がっている

三浦 典子

研究所の活動が今年で10年目を迎えるということだ。その少し前からの滋賀での「ライフストーリー聞き取り」の活動が私と桜井さんたちとの出会いだった。その後、研究所が立ち上がりメンバーに登録させていただいたものの、積極的な活動はできず専ら会費とロム専用の存在と化している。そんな中ではあるが、この期間、個人的に起こった大きなことがいくつかあり、それは本当に極めて個人的なことではあるが、実は社会と密接につながっているということを実感させられた。

まず、一つ目。47歳の時に乳がんが診断され、手術、放射線治療、抗がん剤治療という3大治療を体験し、さらに一年後に子宮筋腫で全摘手術を受けた。がんの治療中に考えたことは後述するが、それはさておき一昨年には卵巣腫瘍が発覚し、これも摘出手術を受けた。近年LGBTさらにQなどという視点が社会で論議されていて、また、ジェンダー的性別と生物的性別というものを否応なくこの身で考えさせられることともなった。女性ホルモンを抑える薬をがん治療のため使用し、子宮も卵巣も摘出した私の「性」は何なのだろうと思うが、やはり意識は「女」だ。私を形成しているXY染色体がなせるのか、長年の学習と習慣がそうさせるのか、「男でも女でもない」ではなく、意識は迷いなく「女」なのだ。そうすると、例えば手術をするとかホルモン投与をするとかで意識が変化するわけではなさそうだなと、たった一つの症例ではあるが、少なくとも一つの例としては思う。自認するジェンダーとは何なのか、どこから形成されるのか。

さて、がんの術後の治療中にはこんなことも考えた。積極的な治療に向かっている時は副作用があろうと「抗がん剤」が唯一の助けにも思えてくる。3時間ほど続く点滴を見つめながらよく思ったものだ。この点滴が私の元へ辿り着いて血管に入るまで、幾人の手を通過したのだろう。この薬を運んでくれた運送会社の運転手は私のことなど何も知らない。もしかしたら嫌々仕事に行った日だったかもしれない。しかしきちんと仕事に向かってくれたおかげで、こうして今の私の治療が出来ているのだ。そして点滴や採血がスムーズにできるよう看護学校や看護大学で指導をしてくださった、顔も知らない方々がいる。誰か一人でもいい加減な仕事をする人がそこに存在したら、この治療の場は成立していなかった。見えないところにいる人たちと互いに自覚なく繋がっている。同じことは私にも言える。しっかり仕事をしようと思った。

ふたつ目の変化は父が亡くなり、地域社会の共同体活動に否応なく参加しなければならなくなったことだ。以前は煩わしく窮屈でしかなかった「在所の付き合い」をする中で、「中山間地で生活するには必要なことが多かった」ということと、その生活が現在の日本の生活をギリギリ守っているということが段々わかってきた。共同体でする作業は、「自治会管轄」と「農業組管轄」と「生産森林組管轄」に大きく分けられる。季節ごとに草刈りをしたり、用水

を管理したり、共有林の下草刈りや道路の手入れをするのだが、これがなかなかキツイ。だいたい半日はかかる上に、山の手入れは夏の朝 6:00 に集合である。作業内容は道路の溝の土上げと、下草刈りが主である。私も格好だけはヘルメットを着用し、ひたすら溝の整備である。そうそう、最近は梅雨が長引き、湿気のせいで「山ヒル」が出て被害に遭うことが多いというオマケまである。しかし、これらの作業ができなくなったら行政がするしかなくなるが、あちらこちらでそうなれば莫大な費用がかかり、税金がどれだけいるか、あるいは切り捨てられ放置されるのかということになるだろう。山の作業をしながら聞いた雑談では、山は草を刈らないと木が成長できない、そして成長した木を管理しないと今度は地面に草が全く生えなくなる、そうすると地肌が剥き出しになり、地表面が崩れやすくなるということだ。山は人間が手入れをしないと山崩れを起こすのだ。日本全国でどれだけの荒廃が進んでいて、それを高齢の何人の人たちがかろうじて食い止めて、けれどいつまで持つのか。近年の大規模な自然災害はもちろん気候変動の影響が大きいだろうとは思いますが、あちらこちらで経済を最優先で進めてきた歪みがさらに被害を大きくしているのだろう。

そんなことを思うようになったのが、私の 10 年である。前にも進めず、過去に戻れるはずもない日本がどこへ行くのか、そこで自分に何ができるのかを考えさせられる日々を過ごしている。

(みうら・のりこ 滋賀県立大津清陵高等学校昼間部)

会員エッセイ

悩みがにじんでいく表現

吉田静

職業柄、自閉スペクトラムの方と接する機会があり、その支援に悩むなかで専門知に頼ることの大事さいつも感じている。経験が浅い私は、私自身の経験知に頼ることができないので、悩んだときには本を手取ることにしている。そこで得た知識をもとに関わり方を変えてみたりすると、この方はこういうことができるんだ、とか、こういう穏やかな表情をされるんだ、とか、関わっている方の新たな一面が見えてくる。そういうことが積み重なって、専門知に基づいた支援は合理的配慮そのもので、権利擁護につながっていくものとして思えてくる。

そうやって私が本で学んだことは、行動をどう分析するかというような、かっちりしている知識であったりして、普段ふわふわと生きている私には息苦しく感じられるようなものも多い。だけれども、そのようなかっちりとした知識の背後に、自閉スペクトラムの方を目の前に、たくさんの失敗や相手にかけての迷惑、それへの反省など、そういった悩みがにじんでくるように感じる。本

自体に「私」が直接的にあらわれてこなくとも、そこに書かれている知識は、誰かが悩みながら生み出したものなのだろうと思いをはせる。

私が思い悩んだときに読むのは専門書だけでなく、エッセイや小説だったり、ときには思い立って映画を観に行ったりもする。小説や映画の多くには「私」は登場しない。それなのに、この小説や映画と一緒に悩んでいられると思ったりする。そのように思わせることができるのは、きっと、一つひとつの表現が考え抜かれて選ばれているからなのかなと最近思う。そういうものに触れると、私ももう少し諦めずに悩んでみようと思まされる思いがして、書いたものから自然と私の悩んだ痕跡がにじむように丁寧に書きたいと反省する。

若者と高齢者とわたし

長澤敦士

生活史調査とは螺旋階段をのぼるようなものだ(ひょっとしたらすでに誰かがこんなことは言っているかもしれない)。もし誰か知ってる人がいたら教えてほしい)。わたしはこれまで若者(わたしと同世代のひと)を調査協力者とする生活史調査をしてきた。しかし、昨年度あたりから高齢者を調査協力者とする生活史調査をする機会が増えた。そんなことで、あまりにまとまりのない「語り」を前にして、立ち往生することが多くなった。調査者の統制がなかなか効かない場で、調査協力者が語ることを「ただ、聞く/聴く」ということの難しさを再

認識している。生活史を聞け/聴けば聞く/聴くほど「わからないこと」が倍々ゲームで増えていく。また、同じ話を何度(本当に何度も!)も聞く/聴くことも多い。もちろん、一見、同じ話として理解できることも、文脈に照らせば、まったく異なる意味を持つ話になることはあるのだが…。そんな時、わたしは「ああ、この話、こないだも聞いたな。」と思いつつ、それでも、語り手の生活史においては極めて重要な出来事であることもあるから、一旦、最後まで聞/聴いてみようと思うのだが、そこで語られることは、やはり前回と全く同じ内容だったりする。「ああ、やっぱり同じ話かあ。」と思いつつ、次は何を質問しようか、と考える。しかし、インタビューの終了時間が近づいていると、わたしも「ああ、それ、こないだ、おっしゃってましたね。」と話を切り上げようとすることもある。そして、その時、わたしは「ああ、やってしまった。」と後悔する。若者の生活史を中心に聞/聴いてきたわたしにとって、高齢者の生活史を聞く/聴くことはいろんな意味で新しい発見ばかりだ。生活史を理解することは、螺旋階段をのぼるような営みであることは、調査協力者による違いはないが、若者と高齢者では螺旋階段の構造(例えば、高さや広さ、深さ)が違う気がする。最近では、そんなことを考えている。

戦争の「裏側」の人々と二十三夜待

筒井久美子

鹿児島県霧島市で地元の方に戦争中の体験についてお話を伺っていた折、当時行われていたという二十三夜待(地元の言葉では「にじゅうさんやまっさあ」という)について耳にする機会があった。このことを誰かに伝えたいと思いつつ、これまで機会が得られずにいたので、ここで皆様にお話させていただきたい。

そもそも霧島市でお話を伺っていたのは、筆者が祖父の友人の足跡調査をしているからである。彼は祖父と小中学校の同級生で、1945年4月28日に神風特別攻撃隊として出撃し18歳で亡くなった。出撃前の2週間ほどは、霧島市にあった国分第一基地と国分第二基地で待機しており、霧島神宮や温泉地の日当山にも足を運んでいた。そこで、出撃前の日々を彼がどのように過ごしていたのか手がかりを得るために、当時、基地周辺で生活していた方にお話を伺っていた。

二十三夜待のお話を伺うことになったのはその折だった。お話して下さった有川和秀さんは1940年生まれで、ご家族は駅前で旅館を営んでいたが、父と叔父が出征したのは、有川さんと弟さん以外は女性の6人家族であった。戦後は地元の小学校で校長先生まで務められ、郷土史にも明るい。筆者の聞き取りのお願いを快く引き受けてくださり、地元の戦争体験者を集めてくださった。2023年12月と翌3月にお話を伺ったのだが、終戦時は5歳であった有川さんはその頃の出来事や気持ちをとても明瞭に記憶されていて、物語のような語り口に筆者は引き込まれた。

有川さんは、出征者がいる家族にとって、戦地の家族の安否が何よりも気掛かりだったという。そこで頼りにしていたのが戦地からの手紙であったが、手紙が途絶えだすと「こんなことをするんです」と二十三夜待について語って下さった。

そもそも二十三夜待とは、旧暦二十三日に月の出を待って拝礼する月待信仰の1つで、かつては日本全国で信仰を集めていたといわれる。旧暦二十三日の月はいわゆる下弦の月で、月の出は真夜中の12時頃である。『国分郷土誌』(国分は現在の霧島市の一部)によると、かつては鹿児島県でも全土で行われていたが、この夜の月は旅に出ている人、特に船旅の人を守ってくれるという言い伝えがあり、漁船員の家族の多い集落で盛んにおこなわれていた。アジア・太平洋戦争中には、出征中の家族の無事も祈願していたという(国分郷土誌編纂委員会編1998:728)。

有川さんの家でも出征中の家族の無事を願って二十三夜待を行っていた。その日は燈明を灯し、お祈りをして、おしゃべりをしながら月が出るのを待つ。さらに、有川さんの家では、戦地に行っていた父や叔父のボタンを使って安否を確認していたという。洋服からボタンを外し、それを糸で縛って手で持って吊り下げ、みなでじっと見守る。吊り下げたボタンが動くと、そのボタンの主はまだ生きてると細やかに安堵したという。

有川さんは、手で持っているのだから動くはずで、屁理屈なんですけどねと笑いながらも、「それぐらい家族はですね、やっぱり必死だったんですね」と振り返る。そして、戦争の話は男性が前面に出てくることが多いが、その「裏側」にいた人びとの祈りや、戦地へ送り出した息子や婿らの安否を思いながらの暮らしがあったといい、「やっぱりそういう(二十三夜待のような:引

用者注)お祭りをせんと、もう気が済まなかったんじゃないですかね」とおっしゃっていた。

よそでは見せられなかったであろう「やりきれなさ」が、二十三夜待という形をとって表出されていたというお話は非常に印象的であった。また、筆者は戦時中、家族や地域が国の論理に飲み込まれていったというイメージを持っていたため、古くから家族や地域で行われていた出郷者の安全祈願の慣わしが、戦時中も続けられていたことは新鮮な発見であった。二十三夜待でボタンを吊るして安否を確認したという記録は管見の所発見できておらず、何に由来しているのかも気になるところである。

『国分郷土誌』によると、終戦後、二十三夜待は行われなくなったという。二十三夜待に集う人びとは戦争中も変わらず「郷土を離れている人」に思いを馳せ続けていた。しかし、もし戦争の影響で、思いを馳せる対象が「郷土を離れている人」全般から「出征者」に縮減され、その結果、二十三夜待自体も失われてしまったのなら、身勝手ながら少しさびしいような気もした。

[引用文献]

国分郷土誌編纂委員会編、1998、『国分郷土誌 下巻』国分市。

第 20 回調査研究講習会の報告

2024年7月28日(日)に第20回ライフストーリー調査研究講習会を開催しました。ライフストーリー／ライフストーリー研究法の発展を社会調査法の歴史の中に跡付け、ライフストーリー研究における対話的構築法の基礎となる理論や解釈・分析に役立つ概念について紹介しました。

以下に、参加者の感想(抜粋)を掲載します。

○ライフストーリーとライフヒストリーの違いや、語りの捉え方の違いについての議論が非常に興味深かった。

○生活世界のなかに社会的世界があり、これを解釈して話を聴くと物語が広がる、インタビュアーの支持的な発話により、否定的な人生から肯定的な人生へと変容するところが興味深かったが、インタビュアーの力量が問われるため難しいとも感じた。

○大学院の看護研究法の授業で、研究に向き合う心構えとして、自分の経験値、価値観で判断したり、考えている、ということ意識する必要があるということ学んだが、Reflexive な自己言及「構え」で説明された「自分のもつ色眼鏡(先入観、偏見、既存仮説など)に気づく」ことが大事であるということ改めて認識した。

○LH や LS について初学者のため、研究法として構築されてきた歴史や哲学的背景などを学ぶことができ、大変勉強になった。実際に自身の研究においてこの手法を使うためには、さらに理解を深め、ブレイクアウトセッションでディスカッションした事例のような具体例に、どのように適用していくかという視座を獲得する必要があると感じた。

○ライフストーリーの土台にある、ライフヒストリーのことについても理解を深めることができた。そのことがあったおかげで、ライフストーリー研究法の意義について、よりよく学ぶことができたように思う。

日本ライフストーリー研究会 第 10 回研究集会報告

例年の「夏期研究集会」を引き継いだ「研究集会」(第10回)が、2024年9月15日(日)に開催されました。ワーキングのメンバーを中心に企画された今年度の研究集会では、「インタビューの対話における気づき、驚き、悩ましさ」というテーマで、午前・午後の二部構成で報告とブレイクアウトセッションが実施されました。午前の部は、伊藤文子「無意識の誘導尋問からわかった自分の「構え」の強さ」、佐藤正則「複数のヴァージョンの語りからみえる構えの変化」、早藤夕子「ノッテあげるができない私」の3報告、午後の部は、吉田静「5年を経て感じとる語りのことば以上のこと」、寅丸真澄「あのととき、あなたは誰に何を語ったの?」、山本哲司「とまどいの語りから聞き取りを考える」の3報告でした。2回のブレイクアウトセッションを通して議論を深めました。集会後は、飲食をともにする懇親会を楽しみました。



以下に、参加者の感想(抜粋)を掲載します。

○皆さんそれぞれが悩みの渦中にあり、その内容は分野問わず共通することもあるのだなと思いました。分野にとらわれず集まって話してみることの意義を実感しました。

○これまで言語化せずに来た疑問や問題点が言語化され、あらためてその存在に気づいたように思います。また、問題意識や研究分野、調査対象者の異なる方々が集まったことで、分野ごとに研究者、調査対象者、他の研究者(研究評価者)それぞれの構えがあり、そのせめぎ合いの中で、研究がなされ評価されていくということを再認識しました。

○言語教育系の複数の学会に所属していますが、いつもは聞くことのできない、看護や社会学など、幅広い分野のご研究を聞くことができ、「ライフストーリー研究」にますます興味が湧きました。インタビュアーとインタビュー어의ポジショニングやその関係性の記述、「妥当性よりも説得性」など、自分が悩んでいたことについてもヒントを得ることができました。

○修論に向けてインタビューは取れているものの分析をどうしたらよいか悩んでいましたが、本日、皆様からいろいろお話をお聞かせいただき、方向が見えてきたように思います。研究者も「主体」として身を削りながら研究していること、研究の問いだけでなく自分の生き方の問いも追究していることに、ライフストーリー研究の奥深さを感じ、熱いものが込み上げてきました。ライフストーリー研究に出会えてよかったと思った瞬間でした。

○午前、午後とグループ討議はとてもありがたかったです。発表を聞いていても十分に理解できていない部分があり、グループ討議の中で理解が深まりました。また、個別な相談をすることができ、悩んでいることが悩んで良い部分であることが分かり、頑張ろうと思えました。

○発表をお伺いして、ライフストーリー研究の難しさに悩んでいるのは自分だけではないと知りました。また、ご発表内容の「気づき、驚き」については、自分はこのように掘り下げて「気づき、驚き」を得られていたかどうか振り返り、自省する機会となりました。

○今後、各専門性がわかるワーキングメンバーの紹介などをニュースレターに載せてもよいと思いました。

WGメンバー募集!!

来年度の研究集会(9月を予定)の内容を考えるワーキングGのメンバーを募集します。事務局へご連絡ください。

ライフストーリー研究会 開催報告と今後の予定

LS研7月例会

日時:2024年7月21日(日)13:30~16:30

報告者:烏山房恵さん(一橋大学大学院生)

報告タイトル:日本語が拓く南米日系人介護労働者のキャリア形成

概要:日本で働く外国人介護労働者の中には、デカセギとして来日し、製造業で単純労働に従事した後に、介護士に転職していった南米日系人介護労働者が存在する。本報告では、3名の南米日系人介護労働者にライフストーリー・インタビューを行い、デカセギ南米日系人介護労働者のキャリア形成における問題やその解決策を探った。

LS研11月例会(予定)

日時:2024年11月24日(日)13:30~16:30

報告者:小林多寿子(一橋大学名誉教授)

報告タイトル:森岡清美調査研究資料アーカイブ化の方法と活用への方途——書庫書齋整理作業から

概要:2022年11月から取り組んだ森岡調査研究資料の整理とアーカイブ化作業は、約2年かかって一応の区切りをむかえている。本報告は、森岡書庫書齋における調査研究資料をどのように整理しアーカイブ化をめざしたのか、その方法とプロセスを紹介しながら、社会学的調査資料を知的遺産としていかに継承していくことができるのか、その方途と課題を考える機会としたい。

森岡清美資料室 開室式を開催

家族社会学、宗教社会学で著名な森岡清美先生の調査資料や文献などを収めた「森岡清美資料室」が日本ライフストーリー研究所に併設され、その開室式が10月13日に行われました。お天気に恵まれ、八ヶ岳南麓の清々しい秋の空気に包まれた一日となりました。セレモニーには森岡先生のご家族、そして先生の逝去後に行われた「偲ぶ会」関係者、この資料室開設まで資料の整理、選別を担った方など門下生を中心に、リアル参加とオンライン参加の方々が集まり、賑やかに開催することができました。先生にまつわるエピソードを談笑しながら語り合う時間となり、森岡先生が遠くから喜び微笑んでいるのではないかと感じるひとときとなりました。資料室の貴重な資料を活用保存していくことが、これからの日本ライフストーリー研究所の重要な役割のひとつになります。今後の運営、利用など、みなさまのご理解、ご協力をお願いします。



受け入れ論文、図書、報告書

2024年7月15日～10月14日（下線は会員）

論文、報告書、著書などをお送りください

- ・伊賀聡子・横山恵子・森田牧子, 2024「精神疾患のある母親をもつ子どもたちの困難を乗り越える経験—セルフヘルプグループに集う子どもたちの語りから」『日本精神保健看護学会誌』33-1.
- ・好井裕明, 2024『原爆映画の社会学—被爆表象の批判的エスノメソドロジー』新曜社.
- ・桂木優, 2024(原著は1984刊行)『41人の嵐—台風10号と両俣小屋全登山者生還の一記録』ヤマケ

イ文庫。(遠藤和枝さんからの寄贈)

- ・三浦耕吉郎, 2024『自然死(老衰)で逝くということ—グループホーム「わたしの家」で父を看取る』新曜社.
- ・近藤菜月, 2024『「革命」を語る—ガーナ農村部の民衆運動』ナカニシヤ出版.

新入会員(2024年7月以降、順不同)

東條 理恵(筑波大学社会人大学院生)
瀬戸 麻貴(聖学院大学院生)
王 韻寒(中央大学大学院生)
有澤 舞(北海道科学大学保健医療学部)

ご寄附をいただいた方(順不同)

八木澤良子、今井昭彦、杉座秀親、佐藤正則
運営にご協力頂き、ありがとうございます。

『語りの地平』第9号 12月に発送予定です。

住所変更手続きのお願い

お引越し等で住所が変わられた際には、ライフストーリー研究所事務局まで、住所変更のご連絡をお願いいたします。

年会費の納入についてのお願い

研究所は皆さまの会費で運営しております。会費を未納の方は、お振込みをよろしく願いいたします。2年目未納の方には研究誌は届きません。また2年間未納で自動退会となりますので、ご注意ください。

入退会のご案内

入退会のお申込みは、以下までご連絡ください。
E-mail: jlsr_info@lifestory.or.jp

(社) 日本ライフストーリー研究所

〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ヶ森 1176-489
E-mail jlsr_info@lifestory.or.jp HP: <http://lifestory.or.jp>

